



# ピッポ新聞

2013  
5  
No.268

編集・発行 子どもの本専門店ピッポ&ピッポ古書クラブ  
編集者 伊藤倭男

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

スイスへいつてきたよ (その6)

## マッターホルンの直下までハイキング

ツェルマットに来て3日目の夜になるが、この間夜の食事は一度も外食することなく、スーパーへ出かけサンドイッチなど買ってきてホテルの室で適当にすませていた。どうしても言葉のことがひっかかって、レストランで食事することに気おくれがしてしまうので。海外旅行の楽しみの一つは食事だというじゃないか。それなのに



マッターホルン 右側の壁がアルプス三大北壁の一つで、クライマーの憧れ。真ん中がヘルンリ稜で、マッターホルンの登山ルート。左が東稜

これまでは、その楽しみを味わうことができないでいるのだ。実はツェルマットに到着以來、前を通るたびに気になるレストランが一つあるのだ。それは、名前を「妙高」という日本食レ

ストランである。「こじだったら、おそらく日本人の従業員もいるだろうから、あまり言葉を気にせず食事を楽しむことができると思えるのだ。しかし、ぼくは日本を発つとき「せつかく外国へ行くのに、日本食を食べたとてなんの意味があるつか、絶対に日本食のレストランなどには入るまい」と、決めていたのである。それと、もう一つ躊躇の理由は、「こじが、構えからして値段がいかにも高そうに見えることだった。

なにも日本食を食べたいわけじゃない。だがね、チューリッヒの一泊を入れると三日間もサンドイッチや、パサパサのおにぎり、これはチューリッヒのスーパーで買って一回で懲りたしか食べていないのだ。せつかくスイスへきたのだから、落ち着いた場所で、そう！ワインかビールなどを飲みながらゆっくり食事がしたいだけなのさ。これこそ海外旅行の食事風景というものではないだろうか。

## 初めて入った日本食レストラン

今夜もホテルを出て、バーンホフ通り 駅前通りを、レストランや土産物店などをつらつら、きよろきよろしながら歩いていると、その日本食レストランの看板が、「ねえー兄さん、そんなにやせ我慢することないのよ。ちょっとよってらっしゃいよ」と、微笑みかけてきたのだ。ぼくには断然、そう思えたのだ！その瞬間、日本での決意もどこへやら、奥まったレストランへ通じる小路に足を踏み入れていたのである。

中に入ると係の女性(たぶんスイス人)に、一人であることを告げるとカウンターの席に案内してくれた。そこにはぼくより歳の多い日本人のおじさんがすでに飲んでた。カウンターの中央を見れば、日本人の板前が立っているではないか。それに、カウンターの横のテーブルの席では中年の日本人女性が二人で飲みながら、食べながら話している。あーあ、これなら心おきなく食事ができそうだな。

案内してくれた女性に、まずビールを注文した。板前が「日本のビールとスイスのビールと二種類あるのですが」というから、こんなところでこだわっても仕方ないが、日本でなくスイスのビールを注文した。飲んでみると少し甘いような気がしたが、ぼくの口には合うようだった。

次に、鮭の握りを注文した。板前が「こちらでは『鮭メニュー』といって鮭の握りのほかいろいろセットになっているのですよ。結構量が多いからお腹一杯になりますよ」と教えてくれた。ついでに板前は「スイスは、日本で言うメニューのことを『カルデ』というのだ」とも教えてくれた。

隣のおじさんが話しかけてきた。おじさんはもう二十年前から何度もスイスの山に登りに来ているそうだ。来ると一か月近くは滞在するといふことだ。おじさんは隣のテーブル席の女性たちとも顔見知りのようで、時々話をする。おじさんが彼女たちを紹介してくれた。観光客とは違う場慣れた雰囲気を持った人たちだなと感じていたのだが、彼女たちはスイスに在住しているのだそうだ。

ぼくにはどうしても解決しなければならぬ問題を抱えているのだが、ここで思い切って、彼女たちに頼んでみることにした。

さつき通りにあるカードを入れて操作すると現金が出てくる機械。スイスでは観光地だけかもしれないが普通に通りで目にするのだが、現金自動引き換え機というのだけ。ぼくは日本でも使ったことがないを試してみたが、現金が出てこなかった。無理に操作して、もしカードが機械に持っていかれてしまったらと、考えて何度もためさなかったのだ。

このカード「キャッシュカード」というのだけは旅行のガイドブックを見ていたら、トラベラーズチェックなどより便利だと書いてあったので、旅行を前に新たに銀行に口座を設け、スイスでも使えるカードを取得したものだ。

こちらへ着いた当初は、日本で両替したスイスフランを使っていたが、手持ちが減ってきたので現金を引き出す必要があった。そこで恥を忍んで彼女たちにやり方を教えてくれるように頼んでみた。中の一人が一緒に行ってくれるという。機械はレストランのすぐ前にもあった。

彼女は「カードを差し込んでENGLISHを選択して、次に……」と教えてくれた。彼女のおかげで無事スイスフランを手にする事ができた。

彼女は現在ルツェルンルツェルンならぼくもチップリッヒへ戻るときに寄って観光をすることにしていた町だに住んでいて、ツェルマットには、日本人の団体ツアーのハイキングのガイドとしてきているという。日本の観光会社とシーズン中ハイキ

ングガイドの契約をしているそうだ。なぜ彼女がスイスに住むようになったのかなどすごく興味があったが、そんな個人的事情など聞けなかったけどね。彼女の親切に感謝！

レストランに戻ると、おじさんはそろそろホテルにもどるといふ。「明日もこの時間にここにいらから、いらっしやい」といって帰っていった。このおじさんの言葉に誘われたわけではないが、この後二回もこの日本食のレストランに来てしまった。おじさんとはあれ以来、時間が合わなかったのか、会うことがなかった。

この日本料理の材料は日本から運んでいるのだと思っていたら、すべて鮭のネタから豆腐までヨーロッパのものだと、板前がいったのには驚いた。この板前は去年ツェルマットにやってきたそう、その前はオランダで板前をやっていたという。ぼくもビールをもう一本注文し、これを飲み終って帰ることにした。会計は、日本と違って、レジで支払つのでなく、係がきて席で清算するシステムのような。料金は日本円で七千円くらいだった。

さあ、明日はマッターホルンの登山基地ヘルンリ小屋までハイキングだ。

## マッターホルンを真下から見上げたが……

今朝はあわててホテルを出なくてもいいので、七時半ごろ食堂へ行ったら、初めてほかのお客と顔を合わせた。でも日本人はいないようだ。

今朝はちょっと魂胆があつて、テルモスを食堂に持参した。この中に熱いコーヒーをいれて、山まで持っていくというわけである。コーヒーは毎朝小さなコーヒーポットにいれてきてくれるので、これを全部テルモスに入れて、少し時間が経ったところで、何食わぬ顔でお替りのコーヒーを頼んだ。ついでに昼食用にパンとチーズとハムも失敬した。

今朝は、昨日のクラインマッターホルン行のロープウェイと同じ駅から、シュヴァルツゼーというところまでロープウェイで行き、そこが今日のハイキングの出発点である。

天気は昨日のような好天とはいかないが、薄日が差している。マッターホルンを見上げると、中腹から上が厚い雲でおおわれている。た。シュヴァルツゼー



の標高は二千五百八十三メートルで、目的のヘルンリ小屋は三千二百六十メートルで、その差六百七十七メートルで、距離は四キロだとガイドブックにはあった。シュヴァルツゼーは、池のような小さな湖で、ハイキン

グースはそのわきをとおって登っていくよつた。湖には小さな白い礼拝堂が建っていて、それは童話の世界のような風景だった。

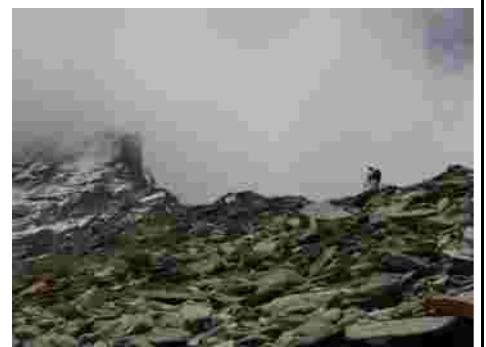


すでに森林限界を超えているので一昨日のオーバーホルンのように周りは岩がちの景色が展開していたが、牧草のような草に覆われているところも多々ある。そんなところには羊の群れが草を食んでいるのだが、その羊の群れの中をグースは登っていた。急な坂を登ぼつて

行くと草は消え、岩ばかりにとつてかわつた。左側は切れ落ちた崖になっていて、鉄梯子が備え付けられているところもある。高度感も少しある。

天気があまり良くないことが関係しているのだろうか、昨日のブライトホルン登山よりも、ヘルンリ小屋に向かう人はずいぶん少ないよつた。少し目を転ずれば、昨日登ったブライトホルンやクラインマッターホルンがよく見える。

急な道のぼりが終わると、少しならかな道がしばらく続いた。この道は右手前方にマッターホルンの北壁を見ながら続いた。やはりマッター



ホルンの上部は厚い雲の中である。マッターホルンに近づくと再び岩山の急ななぼりになるが、今度はつづら折れの道で上を見上げると、ヘルンリ小屋が見えるし、さらにそのうしろにはマッターホルンがのしかかつて見えた。



八時四十五分にシュヴァルツゼーを出発して、ヘルンリ小屋に十時五十分の到着だった。小屋の前のベンチには三人の日本人の登山者がいた。「登のですか」と聞いたから、「こんな状態だから今日は駄目だな」と。左の写真はヘルンリ小屋のすぐ後ろにそびえるマッターホルンだが、これだけ直下だと、晴れていたとしても、頂上はみえるのだろうか？

ふと気が付くと、細かな雪がちらついていた。



登山の「コンディショ  
ン」としては最低の  
よつだ。

ぼくは日本人の  
登山者に「のぼり口  
まではどう行くの  
ですか」と聞くと、  
「小屋を回り込んで  
さらに少し登れば  
壁があるから、そこ  
が登り口だ」と教  
えてくれた。垂直  
に近い壁に垂れ下  
がた一本のフィック  
ス固定された「ロー  
プの末端がぼくの眼をひきつけた。まさにこのロ  
プを頼りに目の前の壁を上ることがマッターホ  
ルン登山の第一歩が始まるのだ。だが、今のぼ  
くには夢のまた夢だな。せめてこれが七年前だつ  
たらなんとかなつたらうか…。 (続く)

### 福音館書店から復刊されました！

絵本十一点

「しめぼしさんのつた」(ましませつこ・絵 わらへ  
つたの絵本 千五百円)

「母さんねずみがおかゆをつくった チェコのわらへ  
つた」(ヘレナ・ズマトリ・コーバ・絵 いでひろ  
こ・訳 千五百円)

「ねこのオーランド」(キャスリーン・ヘイル・  
作絵 脇明子・訳 千八百九十円)

「オーラのたび」ドレーア夫妻作 吉田新一・訳 千  
三百六十五円)

「なんでもみえる鏡」ジプシーの昔話」ライツオスキ再  
話 内田莉沙子訳 ススキージ・絵 千四百七十円)

「ふしぎなやどや」はせがわせつこ文 いのつえよつす  
け画 千三百六十五円)

「おぼけのジュージ」ロバートブライト作絵 光吉夏  
弥訳 千五百五十五円)

「ヤンメイスとりゅう」中国の昔話」松屋直 関野久子・  
再話 譚小勇絵 千三百六十五円)

「おやゆびトム」ペロ童話」リディアポストマ文絵  
矢川澄子訳 千三百六十円)

「ぬまばばさまのさげづくり」オルセン作絵 きむらゆ  
りこ訳 千五百円)

「ろばのナポレオン」レギーレシトラー文 テルオー  
レシニート絵 うえだまにこ訳 千五百五十五円)

### 童話八点

「ガブリちゃん」なかがわりえこ作 なかがわそつや  
絵 千六百八十円)

「黒いお姫さま」ドイツの昔話」ヴェルヘルムブッシ  
採話 上田真西子編訳 千三百六十円)

「ねずみとえんぴつ」ステイーフ作絵 松谷さやか  
訳 千八百九十円)

「くまのテディ」ロビンソン」シヨン・ロビンソン作  
絵 坪井郁美訳 千四百七十円)

「テディ」ロビンソンまほつをつかつ」シヨン・ロ  
ビンソン作 絵 坪井郁美訳 千五百七十五円)

「けっこんしたからないリスのゲルランゲ」ロッシュ・マン  
ン作 堀内誠一画 山口智子訳 千五百七十五円)

「フランチェスコ」フランチェスカ・ベッティーナ作絵 わ  
たなべしげお訳 千五百七十五円)

「へムロック山のくま」アリスデグレイシ」作 太田大  
八画 松岡享子 藤森和子 共訳 千三百六十五円)

藪内正幸 日本の鳥 六冊

定価は各千四百七十円

「にわや」つえんにくるとり」

「そつげんのとり」

「やまのとり」

「やまのとり」

「かわやめまのとり」 「うみのとり」

### もう一冊復刊された絵本

「ぼくのおじいちゃんのお」天野祐吉文 沼田早苗・  
写真 八百四十円)この本は俳優の加藤嘉さんのさまざ  
まな表情を写真で表し、天野祐吉の文がこれを「モーモラ  
ス」に表現している傑作。

### 六月復刊予定

「くまのたろ」の絵本二冊

「くまのたろ」たろのえりまき」たろとなー ちゃん  
きたむらえり作絵 各八百四十円

### 赤羽末吉のおそがえる」の二冊

「おそがえる」こんい」ぼんい」やまのぼんたじ」んたの  
巻」おそがえる」こんい」おのさんぞくぞつ」けるの  
巻」おそがえる」こんい」しめけとのさまの巻」各千  
四百七十円